



「九千年の森をつくろう！」

～日本から世界へ～

編者：宮脇方式の森を発展させる会

発行所：(株)藤原書店

発行：初版 2022 年 4 月 30 日

本書の第 4 部「宮脇 昭さんとの思い出1～国内篇～」において、61 名の方が寄稿されています。

その中で、(株)研進の加藤ナルミ(進和学園「いのちの森づくり」プロジェクトリーダー)が寄稿した文章が掲載されています。

(P.401～404)

宮脇先生と私

(株)研進 いのちの森づくりプロジェクトリーダー
NPO法人 国際ふるさと森づくり協会
(ReNaFo) 事務局長

加藤ナルミ

沙漠に木を植える

沙漠の生態系が甦れば、地球温暖化、エネルギー問題、途上国の経済問題、人口問題など、地球を取り巻く多くの問題が解決する可能性がみえてきます。学生時代、沙漠緑化に魅了され、卒業制作で「沙漠を緑化するための集落」を計画して以来、木を植えることが私のテーマになりました。

当時、希望に胸を膨らませ沙漠緑化ツアーに参加すると、理想と現実の大きな乖離を感じました。沙漠に植えた木は到底根付くとは思えず、環境問題の深刻さに直面しました。しかし宮脇先生は沙漠に生態系を蘇らせる偉業を成し遂げられ、森づくりの根幹となる「潜在自然植生」の概念で世界に木を植えている。数々の目覚ましい功績に明るい未来の兆しを感じました。

宮脇先生の言葉

「木を植えることは、命を植えること。明日を植えること。一人一人の心に木を植えること。後世につづく命を守るために、木を植えよ」

宮脇先生の言葉を耳にするたび「私もやります」と心に誓っていました。

宮脇先生の森づくりに感銘をうけ、建設業界で森づくりを模索していた時期もありました。建築現場の斜面の土留めに宮脇方式の植樹を検討したり、「都市林（アーバンフォレスト）構想」を会社に提案したりしましたが、熱意だけが空回り。

そんな時、NPO法人レナフォの「植生工学士」資格取得のための自然林再生専門家研修を見つけたのです。当時、週末も仕事があり、子供は小さく、時間と費用を捻出するのが大変でしたが、意を決して申し込み、宮脇先生の講義を受講しました。

その時、目が釘付けになった先生の言葉があります。

「少々のがあっても、大変だなんて考えないでもいい。とにかく前向きに考える。絶対にあきらめない。」

やらずに心配しないで、やりながら考えてもらいたい」
ガツンと喝を入れられたようでした。今でも私はこの言葉に奮起し、気迫に支えられています。

ふるさとの木による ふるさとの森づくり

森づくりに関して「何か自分にできることはないか」と自身に問いかけていると、周囲から、

「苗木はあるけど、植えるところがない」

と、口々に打ち明けられるようになりました。

現在、私が所属する株式会社研進は、社会福祉法人進和学園と共に「いのちの森づくり」に取り組んでおり、障がいのある方々と一緒にどんぐりや木の実からポット苗を栽培しています。

只今、進和学園で育てている苗木は約八〇種類四万本。まさに苗木はあるけど、植えるところがない状況です。

「森づくりをしたいが、お金がない」

そんな声も聞こえてきます。公共の場所でしたら「社会福祉法人進和学園いのちの森づくり友の会」の基金を活用して苗木を寄贈することも可能です。

植樹祭の企画・植樹リーダー養成でしたら、NPO法人レナフォがお力になります。

さらに宮脇方式を継承なさる諸先生方と各種団体ネットワークで構成される「いのちの森づくり2020」プラス1未来へ」が、宮脇方式の森づくりのプロセスと成果を世界にむけて発信しています。

私共でお役にたてますことがありましたら是非お声がけください。

宮脇先生はおっしゃっていました。

「明日からでは遅すぎる。今このときから、未来へ向かって、世界に向けて、共に木を植えていこうではありませんか」と。

いのちの森づくり

二〇一七年から高尾小仏（東京都八王子市裏高尾町）で、「いのちの森づくり」を開催することが決まりました。植樹地は、中央高速道路の小仏トンネルの工事残土による九〇〇〇m²程の盛土場で、土地の所轄は、中日本高速道路株式会社様（NEXCO中日本）。研進代表の出縄と開拓し、植樹祭の主催を当法人レナフォが引き受けました。

この「高尾小仏植樹祭」は、企業（NEXCO中日本他数社）、地方自治体（東京都環境局・八王子市）、非営利

団体（レナフォ）、福祉（進和学園 他三施設）、市民の連携によって開催され、様々な業態の団体が協働で環境課題に取り組む意義深いものです。

二〇二一年までに植樹した苗木は累計一万七〇九〇本、（三八樹種）総面積五〇六九m²。

これまで苗木が何度も獣害や台風の被害でなぎ倒され、夏場はジャングルのようにツル性植物に覆われましたが、苗木の救出にご尽力くださった皆さまのお陰で、荒涼とした大地に生命の息吹がもどってまいりました。

宮脇先生と私達

最後に宮脇先生と言葉を交わした数少ないエピソードを書き留めさせてください。

二〇一七年六月、つくばの植樹祭の帰りに先生の療養先にお伺いした時のこと、植樹祭の報告をして写真を撮ることにになりました。

にこやかな宮脇先生の隣にしゃがみ「左手を繋いでいただけますか」とお願いすると「ご随意にどうぞ」と思ってもよらない言葉が返ってきて笑い転げてしまった思い出の写真です。

紹介させてください。（撮影・安西裕氏）



左：旗野恵子 左上：浦田未央 右上：大久保信子 右：加藤ナルミ